

沖縄本島那覇市において検出した四日熱マ ラリア原虫の1例報告について

琉球衛生研究所 寄生虫部
城間盛吉

1 緒 言

1963年7月3日那覇市開業医師古波倉正照氏よりマラリアらしき一患者の検血依頼があったので、検血の結果四日熱原虫 *Plasmodium malariae* を検出したので興味ある症例だと思い検査成績の概況を報告し参考に供したい。

2 検査概況

患者の住所

那覇市小禄

職業

商業

氏名及年令 高良正文 (52才)

患者は1963年6月25日頃からマラリア様の発熱と共に寒感戦慄を訴え、7月2日那覇市美栄橋町の古波倉医院の古波倉正照医師に診察を乞うた。古波倉医師よりマラリアらしき患者のマラリア原虫検出の依頼があったので、患者の耳朶から薄層、厚層の両血液標本を多数作成し型の通りギムザ染色を行い鏡検した。鏡検所見として薄層及び厚層の標本からマラリア原虫が検出された。薄層、厚層の両標本の一視野には四日熱原虫に特有の形態の帯状体、分裂体、生殖体が検出され輪状体は検出されなかった。標本は熟発作中の形態を備えていた。以上の所見から四日熱原虫 *Plasmodium malariae* と同定した。尚患者は日支事変に出征し中支北支方面で軍務に服し其の間マラリアに感染した事があると云う。復員後今日まで再発したことがなく健康であったと云う。

3 考 察

沖縄のマラリアは戦前主として宮古、八重山諸島に於いて相当猛威を揮っていた。今次沖縄大戦による衛生状態の悪化と食糧不足による栄養低下、住民の疎開地からの移動、海外及び戦地からの引き上げ者（復員者の中にはマラリア原虫保有者が居た）、その他悪条件が重なり大流行を来たし、1946年には沖縄本島だけでも16,098人がマラリアに罹患し660人がそのために死亡している。このため米国民政府は本格的な防遏計画を樹立し、沖縄本島各地区に地区衛生課を設置蚊の駆除作業としてDDTの撒布を実施した。生活環境が漸次改善されると共にマラリア患者の発生も次等に減少し、1953年頃には沖縄本島に於いては殆んど終熄したのであるが、宮古、八重山群島においては撲滅する事が出来なかった。1957年7月米国民政府は在日米軍第406医学研究所のウィラー博士を招へいし、台湾及び東南アジア各地で効果をあげたWAO方式によるDDTの屋内残留噴霧と服薬治療を宮古、八重山の両島に実施、以後両島に於けるマラリア患者も年々減少し現在では患者

皆無の状態である。 第1表。

第1表 マラリア患者発生状況
(1956年～1962年12月現在) 厚生白書(1963年)に依る

年次	全 琉	沖 繩	宮 古	八 重 山
1956	2,241 (50,867)	1 —	29 (6,977)	2,211 (43,890)
1957	1,788 (49,664)	2 —	56 (2,253)	1,730 (47,411)
1958	425 (51,165)	1 —	54 (56)	370 (51,109)
1959	59 (49,274)	0 —	1 (34)	58 (49,240)
1960	4 (50,411)	0	0 (572)	4 (49,839)
1961	5 (52,426)	0	0 (64)	5 (52,362)
1962	0 (51,839)	0	0 —	0 (52,839)
計	4,022 (355,646)	4 —	140 (9,956)	4,378 (345,690)

- 註 1. () は検血人員である。
2. 八重山の患者中には原虫保有者を含む。

以上が沖縄に於ける戦後のマラリア発生の概況であるが、今回那覇市内から四日熱患者1名生じた
と云う事は甚だ興味ある問題である。四日熱原虫を媒介する *Anopheles annularis* は沖縄では未だ報
告されていない。中国大陸で感染したマラリアを20余年も自分の体内に保有していたと云うことは
医学上稀な1例と思われる。四日熱原虫と同時に患者周辺の環境調査を実施したが *Anopheles*
annularis は発見出来なかつた。尚宮古、八重山両群島には *Anopheles minimus*, *Anopheles harcanus*
sinensis の2種類が報告されている。

4 結 語

私は1963年7月2日古波倉正照医師の依頼でマラリアらしき一患者からの検血で四日熱原虫
Plasmodium malariae を検出したので甚だ興味ある症例だと思い報告した次第である。終りに本調査
に当り貴重な材料を心よく提供された古波倉正照博士に深謝し並に御指導を賜った仲地紀良前所長
及び国古真英検査課長に感謝の意を表す。

尚本検査成績の概要は1966年4月第7回琉球衛生研究所発表会において報告した。

参 考 文 献

- 1) 横川定、森下董、横川宗雄共著、人体寄

- 2) 琉球政府厚生局発行(1963年)、厚生白書
- 3) 琉球政府厚生局公衆衛生課、保健所10周年のあゆみ
- 4) 沖縄群島政府厚生部(1950年)、衛生統計
- 5) 西郷親盛、沖縄県下に於けるフィラリア病に関する研究、熊本医学令雑誌、第16巻第2号(昭和15年2月)
- 6) 八重山保健所篇、八重山群島のマラリア撲滅の成果
- 7) 其他琉球衛生研究所資料

沖縄本島から得た広東住血線虫 *Angiostrongylus* *cantonensis* について

国 吉 真 英 (琉球衛研)
西 村 謙 一 (九大寄生虫)

Angiostrongylus cantonensis は1935年、Chenにより始めて発見された野ねずみの寄生虫である。ところが1962年、Rosenらがハワイで好酸球性髄膜脳炎で死亡した一患者の脳から本線虫を発見して以来、本虫は太平洋地域に広く存在する好酸球性髄膜脳炎 eosinophilic meningoencephalitis の病源体と考えられ、医学上重要な寄生虫となった。本線虫は太平洋地域、オーストラリア、東南アジアに分布するが、その地理的分布は、現在の最も重要な研究課題の一つである。琉球列島からは、1964年、西村、川島、宮崎により、西表島のドブネズミから本線虫が発見され、新分布地として報告された。それに先立ち、第17回本学会に報告の際、宮崎は *Angiostrongylus cantonensis* に対して、広東住血線虫 (カントンジユウケツセンチュウ) の和名を提唱した。演者らは、1965年2月13日沖縄本島読谷村高志保の家屋内で捕かくしたクマネズミ♀、一頭の肺動脈から全長2.5mmの広東住血線虫の♀1匹を発見した。この発見は沖縄本島からの最初の発見であり、現在、分布の最北限である。

琉球列島における広東住血線虫 *Angiostrongylus* *cantonensis* の中間宿主について

西 村 謙 一 (九大寄生虫)
国 吉 真 栄 (琉球衛研)
吉 田 朝 啓 (那覇保健所)

広東住血線虫 *Angiostrongylus cantonensis* の中間宿主に関しては1955年、Mackernas &